

カルチャー・ステレオタイプの危険性・通減の必要性を 認識しない教師とボランティアに関する分析

倉地 曉美

Teachers' and Volunteers' Unreflective Cultural Stereotyping

Akemi KURACHI

目 的

国内の日本語教師や教育ボランティアが、渡日してまだ語学習得の途上にある外国人学習者に与える影響は決して看過できるものではない。そこで筆者は、教師やボランティアがカルチャー・ステレオタイプに対して、どのような認識を持っているのかを明らかにすべく、2002年、西日本で日本語教育に携わっている教師・ボランティアを対象に質問紙調査を実施した。京都市、岡山市、福山市、広島県、愛媛県、大分県在住で、それらの地域にある大学、日本語学校、ボランティア教室のいずれかで日本語を教えている男女8名に、調査対象者の選定と、調査依頼、調査票の配布、回収を依頼した。調査票は123部配布され、3ヶ月後に計91名の調査票が回収された（有効回答率73.98%）。その中でこれまでに日本語教育に携わったことがないと答えている12名を除く79名のデータ分析を行った結果、ボランティアや教師のカルチャー・ステレオタイプに対する認識と自己抑制のレベルには、一定の段階があることが明らかになり、ここに認識と自己抑制の段階仮説を提唱した。（倉地 2003a, b）

本稿では、79名の調査対象者の中で、カルチャー・ステレオタイプの危険性・通減の必要性を感じないと回答した9名の教師とボランティアに着目し、この9名の(1)デモグラフィックス、(2)カルチャー・ステレオタイプの回答傾向、及び(3)彼らが、具体的にどのようなカルチャー・ステレオタイプをもっているのかを詳細に分析する。

方 法

質問紙の「正しいと思うものに丸をつけなさい」という指示文の後、カルチャー・ステレオタイプの有益性、危険性、通減の必要性の有無に関する4つのステートメントの中から、「カルチャー・ステレオタイプは危険である」、「カルチャー・ステレオ

タイプを通減する必要がある」を選択せず、「カルチャー・ステレオタイプは有益である」、もしくは「カルチャー・ステレオタイプを通減させる必要はない」を選んだ9名を本研究の対象者とみなす。

そして、同じ質問紙中の(a)デモグラフィックス、(b)「あなたはどんなカルチャー・ステレオタイプを持っていますか。日頃あなたが日本語教師として、考えるまま、感じるままを表現し、文章を完成してください」という指示文の下に列挙された17項目にわたる「日本人は——」、「中年女性は——」などの刺激語に対する反応、及び(a)(b)の具体的な記述内容を、本研究の分析データとして使用する。

結 果

危険性・通減の必要性を認識しない対象者のデモグラフィックス

本節では、カルチャー・ステレオタイプの危険性ないしは通減の必要性を認識しない対象者（ここではPhase 1の該当者と称する）9名のデモグラフィックスについて論じる。

性別は、男性が1名（男性回答者全体の20%）、女性8名（女性回答者全体の10.81%）で、職業は、現職の日本語教師が5名、学部生が4名で、大学院生でPhase 1に該当する対象者は一人もいない。日本語教師の場合、大体10人に1人が（11.36%）が、Phase 1であるのに対して、学部生の場合は学生の回答者のうちの3人に1人（33.33%）がPhase 1の該当者である。すなわち、教師に比べて、学部生はPhase 1に該当する者の比率が3倍も高かった。このことから、カルチャー・ステレオタイプの危険性・通減の必要性を認識していない対象者は、現職の教師よりも学部生のほうがより顕著であるといえよう。

日本語教育歴についてみれば、5年以上の教歴をもつものが3名（9.09%）、2年以上4年未満が2

名 (12.5%)、2年未満のものが4名 (18.18%) であった。長い教歴を持つ対象者ほど、Phase 1 に該当する割合が少ないことがわかる。逆に言えば、危険性、遁滅の必要性を認識していないものは、日本語教育の経験が少ないものほど多い。

次に年齢構成は、20-30歳未満が5名 (15.63%)、30-40歳未満が1名 (4.55%)、40-50歳未満が2名 (16.67%)、50歳以上が1名 (11.11%) である。本研究に協力した30代の回答者の中でステレオタイプの危険性・遁滅の必要性を認識していないものは、4.55%に過ぎないのに対して、それ以外の年齢層における Phase 1 該当者は、1割強 (11~17%) という結果が出ている。

出身地に関していえば、規模別に見ると、中都市出身者が7名 (14.89%)、町村出身者が1名 (8.33%) (無回答1名)で、地域別では中四国が6名 (12.76%)、九州・沖縄が2名 (15.38%)、東海・中部が1名 (20%) となっており、大都市出身者が一人もいないのが特徴的である。

次に長期海外生活年数は、「なし」が8名 (21.62%)、1-3年未満が1名 (4.17%) で、全くないものが多く、海外生活経験がある場合でも、その潜在期間は比較的短い。外国人との交友関係についても、なしと答えたものが一番多く5名 (23.81%) で、仲間があると答えたものが3名 (16.67%) となり、心友があると答えたものが1名 (4.35%)、さらに心友も仲間もいると答えたものは1名 (6.67%) であった。外国人の親族に関しては、全員がないと回答している (13.43%)。また9名のうち、日本語教育以外の国際交流活動を体験したことがあるものは3名 (12.5%)、ないと答えた者は6名 (11.32%) で、ない者が9名中7割近くを占めている (66.67%)。このことから、海外生活経験の長さや外国人との交友関係の度合いが、カルチャー・ステレオタイプの危険性・遁滅の必要性の認識に深く関わっていると類推できる。私的なかわりに関しても、頻繁と答えたものは一人もおらず、めったにないと回答した者が9名中最も多く5名 (31.25%) で、次いで、時々と答えたものが3名 (8.11%)、全く無いと答えたものが1名 (11.11%) だった。このことから、カルチャー・ステレオタイプの危険性、遁滅の必要性を認識しないものは、頻繁に異文化とさまざまな交流をしている者ではないこと、また悪意にしている外国人も少なく、質的にも量的にも異文化接触体験をあまり持たないものに顕著であること

がわかる。

一方、異文化に対する態度 (複数回答) に関しては、9名中、5名が①の「世代や国籍などに関係なく、いろいろな背景の人と接することに意欲的である」を選択しており、次に4名が⑥の「外国人と関わる機会の多い職業につきたい」を選んでいる。以下⑤の「将来外国で仕事がしたい」が3名、④の「人の意見に影響されやすい」が2名、無回答が1名で、②の「外国にあこがれを持っている」、③「外国人に抵抗感や違和感がある」を選択したものは一人もいない。

カルチャー・ステレオタイプについての具体的な記述の量

カルチャー・ステレオタイプの危険性・遁滅の必要性を認識しない対象者の大きな特徴としては、カルチャー・ステレオタイプに関する質問項目への回答数が多く、9名全員の回答数が12以上17以下 (平均値15.67) で、危険性・遁滅の必要性を認識している対象者のステレオタイプ数0以上10以下 (平均値5.36) に比べて、非常に高い数値を示している点が挙げられる。これは、Phase 1 の対象者の場合、ステレオタイプに対する awareness が低い分、抑止力が働かず、具体的なカルチャー・ステレオタイプが生じやすい状況にあることを示している。実際9名中最も多かったのは、日本語教師としての立場から具体的なカルチャー・ステレオタイプの記述を求める質問項目に対して、全問解答した5名 (回答数17) で、以下回答数15が2名、14と12が各1名ずつであった。Phase 1 に該当する9名のうち、現職の日本語教師の平均ステレオタイプ数は15、学部生は16.5で、日本語教師より学部生のほうが若干ではあるが、カルチャー・ステレオタイプをより多く表出していることがわかる。

危険性や遁滅の必要性を認識しない教師のカルチャー・ステレオタイプ

1. 日本人

ここでは、日本人とは何かを曖昧にしたまま、物議を醸すことを承知で、敢えて日本語教師が日本人に何をイメージし、どのようなステレオタイプを持っているのかを問うた。Phase 1 の9名の対象者の反応は、「だまされやすい」、「閉鎖的」、「親切」、「本

音と建前」,「働きすぎ」,「前進するのが下手」,「おとなしくまじめ」,「非個性」,「集団主義」各1とポジティブなものもあれば,ネガティブなものもあり,多様であった。とはいえ,これらの記述を見れば,70年代から90年代にかけて隆盛を極めた日本論,日本人論の言説が,根強く対象者の日本人ステレオタイプに大きく反映していることは自明であろう。

a 東京人

次に,首都圏一極集中型社会といわれる現代日本で,最も多くの情報が報じられる一方で,本研究の対象者である西日本在住者にとって,概して物理的に離れていて,なじみの薄い東京人についてのステレオタイプについて問うてみた。9名の対象者のうち,東京人に関して,「冷たそうに見えて親切」と答えるものが1名,無回答が2名あったが,残りの6名はクールで,スマートで,個人主義的な都会人としての東京人のイメージを示した。「冷たい」と答えたものが2名,「他人のことを気にしない」,「気取っている」,「無口」,「スマート」,各1名ずつという結果であった。)9名中,関東出身者・在住者は一人もいないことから,外集団に対するステレオタイプが,紋切り型で固定化された均質的なイメージに収束しやすい傾向が現れたと考えられよう。

b 関西人

本研究の対象者である西日本在住者にとって,関東人に比べれば比較的身近な関西人はどのように写るだろうか。Phase 1 の対象者の反応は「おしゃべり」,「よくしゃべる」,「話し好き」,「皆漫才師のよう」,「よく笑いおしゃべり」,「明るく気さく」と日本のマスコミなどによって広く流布されている関西人の多弁さ・笑い,陽気さを示すステレオタイプを申告したものが,6名ともっとも多かった。そのほかに「自分をかえれない」,「自己中」,「テンポが速い」という回答が各1あった。9名中,関西出身者は一人もおらず,マスメディアによって拡大生産されている紋切り型のイメージ,ないしは,一般的な都会人にありがちな個人主義的傾向やテンポの速さのいずれかを指摘するにとどまっており,ここでもa同様,外集団を均質的にみる傾向が表出されていると言える。

2. 中年女性

次に中年女性に関するステレオタイプに関しては,あえて質問を設定する段階で国籍を特定しなかったが,「度を越えた積極性」,「押しが強い」,「声大」

「自己中」,「文句言い過ぎ」,「周りを気にしない」,「自分を見ようとせず,他人のことばかり気にする」が各1で,いずれも,自我や自己主張が強烈で,視野が狭く自己中心的な側面を指摘する者が7名あり,それ以外には「まじめ,勉強熱心」,「おおらか」と答えるものが各1あった。刺激文ではあえて,日本の中年女性と限定していないにもかかわらず,対象者の回答が,日本のマスメディアなどによって社会一般に広範に伝播されている「あつかましく自分本位な日本の中年女性」の強烈で,ネガティブな紋切り型のイメージに結びついていることがわかる。

対象者の,中年女性に対するステレオタイプは,他の集団に対して表明したカルチャー・ステレオタイプのどれよりも,際立ってネガティブな様相を呈している。これは,(日本の)中年女性が,彼らにとって,自らが日本語教師としての役割を發揮しなければならぬ学習者ではないこと,言い換えれば中年女性は,調査対象者がどれほど否定的なステレオタイプを持つと,立場上差し支えない対象であるため,ネガティブなカルチャー・ステレオタイプ表出に対する抑止力が働かず,歯に絹を着せぬ単刀直入でシビアなステレオタイプが出現したと見ることができる。

3. アジア人

ところで,自らもアジア人の一員であるに違いない対象者たちは,アジア人というものに対して果たして,どのようなカルチャー・ステレオタイプを抱いているのだろうか。ここでは,「勤勉」,「働き者」と,まじめさを指摘するものが2名,「陽気」,「活気があり,にぎやか」と明るさを指摘するものが2名,「先生を敬う」,「親しみやすい」,「誠意がわかりやすい」と,礼節をわきまえ,友好的でポジティブな対人態度を指摘するものが3名あり,おおむね肯定的な反応が多く示されている。その他に,「受身的」,「黒目黒髪」が各1名ずつと,わずかではあるが,アジア人の消極性を指摘する回答および,外見的特徴を述べるにとどめるような無難な回答も認められる。

アジア人に対して示された概ねポジティブな反応は,対象者が自らをアジア人と同定した上の反応と解釈するならば,内集団に対する身焔員とも考えられる。しかし,ここでは,国内で活動する日本語ボランティアや日本語教師にとって,彼らが接する学習者の圧倒的多数が,アジア人であることにも着目

する必要がある。すなわち、先の中年女性の場合とは逆に、ここでは日本語教師という立場から、大多数の学習者が帰属する文化集団としてのアジア人を否定的なイメージで捉えてはならないという強い抑制が、多くの回答者の間に働いたという解釈も成り立つし、同時に又、アジア人に対する好意的な見方ができる人々だからこそ、国内における日本語教師、ボランティアという職業に興味を持ったとも考えられる。いずれの解釈が妥当かを明らかにするためには、彼らがアジア人というものをどのように捉えた上で、この質問に回答したかを追跡調査で、さらに詳しく調査する必要があるだろう。

4. アメリカ人

さまざまな世論調査で、日本人が、もっとも関係の深い国民と位置づけるアメリカ人に対して、ステレオタイプの危険性・通減の必要性を認識しないPhase 1の日本語教師（ボランティア）はどのようなカルチャー・ステレオタイプを抱いているのだろうか。周知のとおり、日本のマスコミがアメリカについての報道をしない日はないといってもよいくらい、世界の国々に対する報道の中で、アメリカやアメリカ人についての記事はひときわ多い。アメリカに関する情報量の多さ、多様性を反映して、対象者のカルチャー・ステレオタイプは、外集団であるにもかかわらず「わがまま」、「物怖じしない」、「自己主張強い」、「金髪」、「元気」、「陽気」、「個人主義」、「褒め上手」、「言葉巧み」と十人十色である。特に先のアジア人に対する概ねポジティブなステレオタイプに比べると、「わがまま」、「自己主張が強い」などネガティブな反応をするもの、「元気」、「陽気」、「褒め上手」などポジティブな反応を示すもの、「物怖じしない」、「個人主義」、「言葉巧み」など肯定的なのか、否定的なのか、あるいは中立的なのか、いずれとも判断がつかない、どちらとも取れるような反応を示すものに3分していることがわかる。

対象者の反応が、林・西平・鈴木(1954)、我妻・米山(1967)、中村(1999)の「アメリカ人に対しては好意的なステレオタイプを持っている」という先行研究の結果と異なる理由としては、次の5のアラブ人のステレオタイプにも関連するが、2000年9月のアメリカの同時多発テロ事件発生からアフガン攻撃を経てイラク戦争に到るまで、連日のようにテレビや新聞紙上を賑わし続けた一連の両義的なアメリカ報道（テロに屈せず、自分たちの主義主張を明

確にし、それを貫徹しようとする態度に同調する内容、アメリカの一国至上主義への批判的な内容など）が、本研究における対象者の回答に多大な影響を与えていることは否めない。反応が3分したのは、マスメディアによって流布されたアメリカ人に関する雑多で多義的な情報から、各人がそれぞれの認知枠を通して適当なものを取捨選択し、それを自らのステレオタイプとして取り込んだ結果と見ることができるのではないだろうか。

5. アラブ人

本研究では、国内で日本語教育に携わる教師にとって、日常レベルでは比較的なじみの少ない、しかし同時多発テロ以降、日本国内でもにわかにクローズアップされ、新聞紙上を賑わせているアラブ人を質問項目に加えた。その結果、既に4で論じたように、調査実施時に、マスメディアによって連日頻繁に行われたアラブ人に対する様々な報道の影響を反映して、9名のPhase 1の対象者の中にはそれぞれ独自の明確なステレオタイプが形成され、それが表出されていることがわかる。「宗教的」、「背が高い」、「遠い国に住んでいる」、「気難しい」、「親切」、「心が強い」、「おおらか」、「顔が濃い」、「民族意識が強い」とそれぞれに異なる反応を示している。ここでも、対象者の反応は「親切」、「心が強い」、「おおらか」と明らかにポジティブなもの、「気難しい」のようにネガティブなもの、いずれとも一概に言えないもの——「宗教的」、「背が高い」、「遠い国に住んでいる」、「顔が濃い」、「民族意識が強い」に3分されるが、明らかにネガティブと断定できるステレオタイプを表出しているものは1名に留まっている。

6. イスラム教徒

アメリカの同時多発テロ以降、5のアラブ人に加えて、イスラム教徒に関する報道も本調査の期間中頻繁に行われていた。言うまでもなくイスラム教徒は、インドネシア人、マレーシア人など、国内で日本語を学ぶ学習者の中にも比較的少なくない。Phase 1の対象者のうち2名は「宗教心が厚い」と答えているが、7名の回答は「厳格」、「理解できない宗教を信じている」、「まじめ」、「まじめで勉強熱心」、「献身的」、「宗教にこだわりすぎ」、「肉を食べるとき大変」と概ね熱心で戒律を厳格に守るまじめな側面が強調されており、ネガティブな反応が少ない。イスラム教徒のすべてが厳格ではないし、世界

には実に多様なイスラム教徒が存在するのにもかかわらず、イスラム教徒がこのように均質なイメージでとらえられるのは、同時多発テロ以降、マスメディアによって砲火集中的に日本中に席卷してしまったイスラム教原理主義者についての特化したイメージが、対象者のステレオタイプ形成に大いに反映しているからであろう。

7. 留学生

多くの調査対象者にとって身近な存在であり、日本語を教える対象でもある留学生一般について、対象者はどのようなカルチャー・ステレオタイプを有しているのだろうか。ステレオタイプの危険性・通減の必要性を認識しない9名中7名は、「まじめ」、「熱心」、「勉強熱心」、「勤勉」と回答している。それ以外の回答として、「幸せ」と回答したものが1名、「自己主張が強い」と回答したものが1名ずつあり、留学生に関しては、社会的に望ましい反応として概ねポジティブな態度に言及する傾向が強い。

a 中国系留学生

本研究では、さらに細かく留学生の出自を特定することによって、カルチャー・ステレオタイプがどのように異なるかを調べてみた。まず日本に留学する留学生の中で最も人数が多く、先行研究によれば日本の若者に好かれる国民としても、嫌われる国民としても上位にランクされる(中村 1999)、あるいは好悪に個人差が見られる(我妻・米山 1967)中国人に対して、本研究の調査対象者はどのような反応を示すだろうか。

中国系と一口にいても、大陸と台湾ではイデオロギーも異なるし、中国大陸の少数民族も、世界各国に根を下ろしている華僑も中国系には違いない、ここでは敢えてそれらを一括りに中国系と言う刺激語でまとめ、そのような社会的・文化的に幅広い集合体を指し示す言葉から、日本語教師が一体何を想起するか調べることにした。

ステレオタイプの危険性・通減の必要性を認識しない9人の回答はそれぞれ、「おしゃべり」、「よく話し、文法好き」、「とてもまじめ」、「まじめそうで要領がいい」、「わがまま」、「発音が下手」、「自分の意見をいわない」、「掃除ぎらい」、「より良い条件を選ぶ」と多様で、「よく話し、文法好き」「とてもまじめ」のようなポジティブな回答もあれば、「まじめそうで要領がいい」「わがまま」、「発音が下手」、「掃除ぎらい」など明らかにネガティブな回答も少

なくない。また「おしゃべり」、「自分の意見を言わない」、「より良い条件を選ぶ」などいずれとも判断しがたい反応も示されており、先行研究の結果と同様の多彩な回答傾向を認めることができる。

b 韓国系留学生

国内で、中国系の次に数が多いのは韓国系の留学生であることから、ここでは韓国系の留学生に関するステレオタイプについての項目も設けた。Phase 1の対象者9名のうち、「まじめ」と回答するものが3名で、以下「熱心」、「まじめで、こつこつ」、「真剣」、「礼儀正しい」、「文法が得意」、「無表情」、「わかっていても黙っている」が各1という結果になった。寡黙さ、無表情などコミュニケーションの消極性を指摘する反応が認められるものの、ここでは全般に、まじめ、勤勉、熱心、礼儀正しさなど、ポジティブな態度を指摘する反応が多かった。国内で行われた民族的偏見や好悪についての先行研究では、「朝鮮民族」(我妻・米山 1967)、「北朝鮮人」(中村 1999)のそれについて問うた研究があるが、いずれも日本人の好感度、受容度が非常に低かった。本研究の結果とは異なる結果が示された理由として、2002年のワールド・カップの報道と、本研究においては「韓国系」という言葉を使用している点が、大きく作用していると考えられる。又、アジアや韓国に対してポジティブなイメージを持っている人々だからこそ、国内の日本語教師という職業に関心を持つことができたとも考えられる。

c 英語圏留学生

偏見・ステレオタイプに関する様々な先行研究(前掲)では、日本人の欧米志向(脱亜入欧の傾向)、とりわけイギリス人、アメリカ人に対する好感度の高さが指摘されている。国内で日本語教師や日本語ボランティアに携わる人々は、概して英語圏より、むしろアジア系学習者に接触する機会が圧倒的に多い。その彼らは、英語圏留学生に対してどのようなステレオタイプを有しているのだろうか。英語圏留学生には、アングロサクソン系のイギリス人やアメリカ人、カナダ人だけではなく日系人も当然含まれるし、香港、シンガポール、フィリピンなどアジアの留学生、中国語などと英語とのバイリンガルも、含まれるが、ここでは、あえてその点を曖昧にしたまま、質問項目を設定し、対象者の反応を見ることにした。Phase 1に該当する9名の教師・ボランティアの英語圏留学生に対するステレオタイプは「社交的」、「自己主張が強い」、「まじめ」、「勉強

熱心」,「大胆」,「フレンドリー」,「オープン・自由」
「漢字に抵抗」,「日本語を英語と比較して考える」
と多種多様であったが,「自己主張が強い」,「漢字
に抵抗」,「日本語を英語と比較して考える」の3名
以外は,概ね肯定的なステレオタイプを有している
といえる。

d 南米系留学生

南米系の留学生は,在日外国人留学生の中でも比
較的少数であり,多くの日本語教師やボランティア
にとって国内で接触機会を得ることがa, b, cに
比べて少なく,また情報を得ることも少ない。この
ように接触機会が少なく,情報を得ることも少ない
学習者集団に対して,教師やボランティアはどのよ
うなステレオタイプを形成するのか。Phase1の9
名の教師,ボランティアのうち,「無回答」が3,
「陽気」が2,「がり勉でない」,「上達の早いもの
と遅いものの差が大」,「おもしろい」,「まじめ」が各
1と言う結果になった。9名の教歴や国際交流経験
が総じて短く浅いことから判断して,ここでの3名
の無回答(33.33%)は,特別の理由があって回答
しなかったのではなく,ステレオタイプを形成する
のに必要な必要最小限の知識すらなく,回答できな
かったと推察される。

「上達の早いものと遅いものの差が大」(1名)
という回答以外の「陽気」(2名),「がり勉でない」,
「おもしろい」(各1名)などには,メディアが報
じるeasy-goingな南米人の紋切り型のイメージを
無批判に受け入れている傾向が認められる。ネガティ
ブな反応がない点に関しては,よくわからないもの
については,ネガティブな判断は下さない方が無難
であるという回答傾向の現れとも判断されよう。

e アフリカ系留学生

アフリカ系と一口にいても,国内で日本語教師
や日本語ボランティアをしていて遭遇する事があま
りないアフリカ出身の留学生と,大学の短期留学な
どのプログラムで比較的身近に遭遇するであろうア
フリカ系アメリカ人とは,文化的社会的背景も非
常に異なるし,単純に一括りにすることは難しいは
ずであるが,ここでは両者の峻別を行わず,質問項
目を設定し,日本語教師や日本語ボランティアがこ
こからどのようなステレオタイプを想起するかを調
べてみた。カルチャー・ステレオタイプの危険性・
遜滅の必要性を感じない9名のうち「無回答」が2,
「まじめ」が2,「勤勉」,「のんびり」,「語学上達
が早い」,「ふじぎ」,「ほこり高い」が各1という反

応を示した。dと同様,ここでの2名の無回答も,
明らかに接触経験がなく,ステレオタイプを形成す
るだけの知識もなく,回答しようにもできなかった
結果であったと思われる。残りの反応に,否定的な
ニュアンスを含むものがないのも,d同様,自分が
よく知らない集団については,ネガティブな判断を
下さない方が無難であるという社会的に望ましい回
答傾向が現れているからであろう。

8. 就学生

日本語教室のボランティアや日本語学校の教師に
とって,就学生は留学生よりも身近な存在かもしれ
ないが,大学でしか教えたことがない学生ボランティ
アや教師にとっては,遠い存在でもある。そこで,
本研究では就学生に対するステレオタイプについて
の質問項目を立てた。9名中,「無回答」は3名で,
「目的は何かと思わせる」,「大変」,「アルバイトに
必死」,「アルバイトに熱心」,「陽気」,「好奇心」が
各1という結果になった。就学生のステレオタイプ
は「陽気」という反応以外,明確にポジティブであ
ると断定できる反応はなく,大変さや生活苦を想起
させる回答も少なくないが,ネガティブな評価は回
避されている。

9. 外国人入国児童・生徒

就学生と同様に,大学関係者よりは,日本語教室
のボランティアや日本語学校の教師にとって学習者
としてより身近な存在である外国人入国児童・生徒
について,対象者は,どのようなステレオタイプを
持っているのだろうか。8同様,ここでも「無回答」
が3名あり,「こども」,「まじめ」,「無口」,「大変」,
「話し上手」,「いい経験になるだろうと思わせる」
という反応が各1名ずつあった。「いい経験になる
だろうと思わせる」のようなステレオタイプとはい
えない反応もあり,「無口」,「話し上手」と全く相
反する反応も認められたが,ここでも,ネガティブ
な反応は回避されていることがわかる。

10. 外国人労働者

外国人労働者と言っても,多国籍企業のエリート
社員から,零細企業で3K労働に従事する肉体労働
者まで,実際は非常に多様であるはずだが,日本の
マスコミ報道の影響で,外国人労働者というと多く
の人々は,主として後者に対するイメージを想起さ
せられるのではないだろうか。日本語教師は,教職

の中でも外国人労働者に接触機会を持つ可能性が高い職種であるが、彼らは外国人労働者という言葉に何をイメージし、どのようなカルチャー・ステレオタイプを想起させるだろうか。Phase 1 の 9 名の対象者の反応を見ると、「勤勉」、「大変」が各 2、「働き者」「よく働く」、「仕事熱心でお金にシビア」、「肉体労働者」、「わけあって渡日」が各 1 という結果で、「勤勉」、「働き者」、「よく働く」、「仕事熱心」といった勤勉性を示す反応が多く、「大変」「お金にシビア」「肉体労働者」「わけあって渡日」からは華やかなエリート社員ではなく、訳ありで、「大変な」外国人がイメージされているが、ここでも総じてネガティブな反応は認められない。

考 察

本研究の対象者の分析結果から、以下に述べるような 6 つの傾向を析出することができる。

- (1) 自虐的な日本人論と自民族中心主義的な日本人論の影響を受けて、日本人に関するステレオタイプは多義的である。
- (2) 相対的に情報量・接触量の多い、日本、中国、米国に対しては多義的なステレオタイプが表出される。
- (3) カルチャー・ステレオタイプに対する危険性・逡減の必要性を認識しない人々は、実際にカルチャー・ステレオタイプを多く再生産する人々であり、多様性を帯びた文化集団 (e.g. 中国系といても華僑や大陸の中国人、台湾の中国人など多様であるが) を一まとめに捉えることの難しさや問題性を何ら認識することがない人々であると結論づけられる。さらに言えば、そこには
- (4) 肯定的・中立的なカルチャー・ステレオタイプならば逡減させる必要はないし、むしろ有益でさえあるのではないか。
- (5) 自分たちが直接教えない対象ならば、ネガティブなステレオタイプで面白おかしく一括りにして扱えたところで、(誰もがやっていることなのだから) 罪はないし、差し支えない。

(6) 情報が少なく、よく知らない集団、及び社会的・文化的マイノリティ集団に対しては、ネガティブなステレオタイプで捉えることさえしなければ、カルチャー・ステレオタイプを持つことに問題はない。といった考えが見え隠れする。

筆者(倉地 2003a)は、既に別のところで、ポジティブ、ニュートラルなカルチャー・ステレオタイプの多義性と、そうしたステレオタイプが孕む危険性・問題性についての議論をしているので、ここで改めてそれを繰り返すつもりはない。いずれにしても本研究の Phase 1 に該当する対象者のように、カルチャー・ステレオタイプという認知的誤謬 (cognitive error) を有益と捉えたり、エラーを逡減することの必要性を認識しない教師・ボランティアが、異文化学習者に及ぼす影響は甚大である。それ故に、学習者に、ステレオタイプなものの見方を植えつけたり、それを助長・奨励するような教師・ボランティアの輩出に歯止めをかけることの重要性が、日本語教師養成に携わる有識者の間で、もっと議論されてしかるべきであろう。

参考文献

- 倉地暁美 2003a 「カルチャー・ステレオタイプに対する認識と自己抑制に関する研究：日本語教師とボランティアの調査」『留学生のカルチャー・ステレオタイプとその対処法に関する研究』平成 13-14 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (研究代表者：倉地暁美)
- 倉地暁美 2003b 「ボランティアと日本語教師のカルチャー・ステレオタイプ：認識と自己抑制に関する研究」『広島平和科学』Vol.25, pp.81-108.
- 中村真 1999 「日本人の人種・民族ステレオタイプと偏見」岡隆・佐藤達哉・池上和子『偏見とステレオタイプの心理学』(pp.87-98), 『現代のエスプリ』No.384 至文堂
- 林知己夫・西平重喜・鈴木達三 1964 「図説・日本人の国民性」至誠堂
- 我妻洋・米山俊直 1967 「偏見の構造：日本人の人種観」NHK ブックス